

令和6年10月29日

令和6年度 第2回岡山県健康の森学園支援学校 学校運営協議会 議事録

令和6年10月19日 10:00~11:50 会議研修室

進行:上野副校長

記録:杉山

参加20名:運営委員11名出席(田中委員 山本委員 守谷委員 3名欠席)、学校職員9名出席

1 開会

○岡本会長挨拶

本校の学校運営協議会が発足してから1年半になり、児童・生徒の教育環境の整備が整ってきている。活発な意見を出し合い、有意義な会にしていきたい。

○定久校長挨拶

会も2年目になり、地域の方がボランティアに来てくださる機会が増え、ネイチャートレイルの整備等が徐々に整い、自然を生かした教育を行うことができています。今後、活動が単発で行われるのではなく、次につながるよう、また、地域の方が学校に足を運んでくださる活動を行っていききたい。

2 議事(ここより、岡本会長が進行)

(1) 令和6年度取組等の報告

①事務局からの報告(上野副校長・山崎主幹教諭)

○第1回学校運営協議会を受けて、今後の取組を説明。(要項P3参照)

- ・「森の駅構想」⇒実現に向けてできることから、連携・協力して進めていく。
- ・施設設備の改善⇒寄宿舎の改修については県に要望していく。プール改修について、外部施設(げんき広場等)使用も含め、検討していく。
- ・近隣学校との研修等の協力⇒11月11日 本校で研究授業を実施。
- ・新見公立大学との連携⇒7月3日に本校で教員研修を実施。(今後も継続して研修を行っていく。)

○地域連携室

- ・地域と学校を繋ぐポジションとして、今年度も活動している。今年度は、ボランティアと学校を繋ぐ役割だけでなく、ボランティア内容等、学校へ提案し、働きかける役割も担っている。
- ・昨年度よりボランティアの回数が増え、活動の幅も広がってきた。9月30日現在、7回実施。

②小学部の取組(鹿島教頭)

「地域との協働活動・地域貢献活動」では、小学部6年生は、学園内の環境整備をしてくださっている森林組合の方へ手作りのうちわにお礼のメッセージを添えて手渡した。「豊かな自然環境を生かした教育」では、生活単元学習「山歩き」において、「秋を見つけよう」という単元で児童それぞれが感じた季節の移ろいを肌で感じながら学びを深めることができた。また、見つけた色づいた葉や木の実などの「秋の素材」を使って、写真や作品を作った。農産班の畑に植えたサツマイモ畑の草取りや、学級園で実った野菜を使って調理実習を行うこともできた。

【成果】自然に触れる心地よさや四季の移ろいを感じながら学ぶことができた。ネイチャートレイルや訓練班の協力もあって、田植え、稲刈り、野菜の苗の購入、育てたサツマイモの収穫など、学園内で活動すること、長い距離を集団でまとまって歩くことができ、体力や忍耐力を養うことができた。

【課題】立地から移動に時間と費用が必要となり、学園内の人材や地域ボランティアの活用にも課題がある。児童の学びの広がりが抑えられることのないよう、アイデアを出し合っていくことも必要と考える。

③ 中学部の取組（鹿島教頭）

「地域との協働活動・地域貢献活動」では、生活単元学習で「健森マップを作ろう」に取り組んでいる。動植物に詳しい地域ボランティアの方をゲストティーチャーとして迎え、ネイチャートレイルを歩き、動植物について関心をもつことができた。また、アンテナショップ「森のおみせ」で2人の生徒が販売学習を行った。遠隔による販売学習も行い、自分たちが作った製品の販売等を行う販売学習を通して地域と交流した。

「豊かな自然環境を生かした教育活動」では、畜産班の訓練班作業で、にわとりのエサの調合と運びをしたり、調理実習で使う「たまご」を購入し、調理したりした。また、新見高校の生徒と一緒に、ネイチャートレイルに設置する「木の椅子」の制作を通じて協働学習を行った。

【成果】地域ボランティアの活用により、健康の森の自然について深く知る経験をすることができた。校外学習では、この経験を生かして、鯉が窪湿原でガイドの話をしっかり聞き、集団としての意識を高める活動に繋げることができた。

【課題】今後は、中学部と高等部の合同訓練班作業も行う予定である。年度末に向けて活動内容の遂行や、学園の自然を生かした活動にするため、次年度に向けて職員からも活動内容のアイデアを募っていききたい。

④ 高等部の取組（大倉教頭）

就労に向けた取り組みとして、1年生は訓練班での作業学習で働く基礎を身につけ、2年、3年で校外実習（年2回）と定期的に地域に出向き作業学習を行っている。地域での作業学習には、企業内社会体験学習、地域型作業学習、企業内作業学習がある。「地域貢献活動」として、清掃班は哲多総合センターへの清掃活動、石けん班は地域の施設に納品し、販売学習を行っている。環境班は、ペットボトルキャップ集めを行い、ワクチン交換としてユニセフに送っている。

【成果】地域において実際に働きながら学び、貴重な経験を積むことができています。事業所やお客様から感謝の言葉をいただくことにより、「自己効力感」「自己肯定感」が高まり、生徒の成長につながっている。また、地域の方々から学校のことを知ってもらう機会となっている。

【課題】学習の振り返りを、次に繋がるものにしていく仕組みづくりを構築し、様々な実態の生徒が、活動に参加する目的や時期（回数）の検討をする必要がある。今後も、学校が地域に貢献できることの洗い出し（製品開発を含む）を行っていく必要がある。

⑤ 寄宿舍の取組（山崎主幹教諭）

「地域との協働活動・地域貢献活動」では、余暇活動の充実に向けて、地域ボランティアの方の協力を得ながら、七夕飾りづくり、楽器演奏体験などの新しい取組を行うことができた。「豊かな自然を生かした教育活動」では、サツマイモ、トウモロコシ等を栽培し、夕食で提供してもらったり、調理実習を行ったりする予定。また、「舍フェスタ」を芝生広場会場に変更して、企画した。（第3回で報告予定）また、誕生寺支援学校寄宿舍とのオンライン交流会を開催した。他校との交流で、健森寄宿舍の良さに気づくことができた。

【成果】七夕飾りの制作や音楽活動など少ない指導員では取り組みにくかった活動が、ボランティアの方の協力で実施することもできた。また、寄宿舍の異年齢の集団の中で、自分より年が上の子や下の子の様子を見ながら、地域の方々や、他校の友達と関わることで、普段は新しいことに挑戦しにくい子どもも、新しいことに取り組むことができはじめた。

【課題】「日常生活をより豊かにする」という視点で、どのような地域交流が向いているのか、どのような活動や工夫を取り入れていくかについて、活動毎に、生活の充実という点に焦点を当てながら、整理し検討を重ねたい。

(2) 学校評価について(鈴井総括教務)

R6年度もR5年度と同項目の内容で、11月1日～11月25日の期間で実施予定である。(要項 P4参照)
R5年度保護者アンケートの結果が、A+Bの割合が全項目で90%以上であった。一昨年度(R4年度)は、80%台であった「保護者への相談活動や研修会の開催などが行われている」「進路に関する情報提供や相談など適切に行われている」などの5項目について90%台になり、肯定的な評価を頂いた。コロナ感染症の影響がなくなってきたことにより、行事等が行われてきたことも肯定的な評価につながっていると感じる。

(若林委員)アンケートの総数を教えていただきたい。

(鈴井総括教務) 家庭数は58名(うち、寄宿舍生53名)100%回収できたが、1～2件重複回答の可能性
がある。

3 グループ協議及び意見交換

A～Cの3グループに分かれて、協議及び意見交換を行った。

○Aグループ 赤木利輔委員、小川正恵委員、名越康世副委員長、若林昭雄委員(上野、山崎、杉山)
「地域ボランティア登録の充実」

(山崎)昨年に比べてボランティアが増えてきたが、もっと人材を増やすためのアイデアをいただきたい。

(赤木)イベントと合わせて行う。実際、子どもと接する機会をもち、子どもや学校のことを知ってもらい、よいイメージ
を増やしてもらえとよい。

(若林)どのような方法でボランティアを募集しているのか。

(山崎)地域連携室が学校のニーズに応じてボランティアを探し、また、今年度より Google フォームでボランティア
登録募集を行っているが、実際、登録してくれる方は少ない。

(杉山)健森応援団という学園支援ボランティアは、昨年より LINE グループを作って情報を発信している。

(赤木)健森応援団の LINE で必要としているボランティアの情報をタイムリーに流せることと、ボランティアの様子
を団員に発信できるという利点がある。ボランティアに来てくださったときに、子どもから次回のボランティア
発信ができるといいのではないだろうか。

(名越)ボランティアで協力したい気持ちはあるが、実際はハードルが高く、参加しにくい。

(若林)具体的な内容を発信したり、ちょっとしたことからできる内容で、まずは、学校に来てもらう、子どもと触れ合
ってもらうことが必要だと感じる。

(赤木)地域のボランティアが増えると防災時への対応につながっていくのではないかと。

(名越)保護者としては実際、寄宿舍にいらっしゃる方が安全と感じる。自宅で被災した場合の方が心配。災害時、地域と
の関りが(ボランティア含め)大切だと感じる。

(若林)避難訓練を見学してもらうなどできることから始め、やがては、災害ボランティアにつながるよう段階的に行
っていければよい。

(千種)実際、地域連携室からのボランティアは、旧職員など学校に関わっていた方が中心で、新しいボランティア
の広がりが少ない状況。

(小川)人材の広がりが少ないので、今後、学校に関わった方からの紹介やつながりで新しいボランティア発掘を行
っていきたい。

(山崎)まずは具体的な内容を広く募集し、学校に来ていただく機会をもつようにする。子どもや学校の様子を知っ
てもらい、地域ボランティア登録を広く充実させるところから始めたい。

○Bグループ 岡本委員長、中川隆雄委員、長谷川晋委員(鹿島、鈴井、安原)

「多くの教員が健森に来る機会を増やしていきたい」

(長谷川) 以前、本郷小にいた時に、フラワータイムや田植え、マラソン大会など実際に交流をさせていただき、冬に交流してもいいなと感じた。小学校が校内研修をする時に打ち合わせをした。

(中川) 小中学校として、交流の場を提供していただけると、とても指導者としてもありがたいし、子ども達の学ぶこともたくさんあるのではないかと。小中学校の子ども達はやはり心が伸びていくと感じた。他校との交流や地域の方との交流の実施継続。「つなぐ」「つなげる」多くの場面を設けて、地域の方と交流をしたり、小学生、あるいは中学生との交流事業もあったり。また、他校とのオンラインでの交流もあるということが分かった。

(鈴井) コロナの時に、オンライン交流を行っていた。今年も実際に会うのは一日だけということがあったが、実際に会う前にオンラインで繋いで自己紹介をするなど工夫した。これからは「つなぐ」とか「つなげる」ということがキーワードになってくるのではないかと。そういった交流なり地域に出かけて行つての活動とか、自己肯定感を育む取り組みがとても良いと思った。

(定久) 新見市内の先生方の研修会など、本校を会場にして行っていたということも増えていったらと思う。子ども達も交流校だけでなく、ネイチャートレイルなど誰でも使える場所があるので来ていただきたい。本校が整備をさらに広げてゆき、地域の子供達が来て活動したり、一緒に活動したりする機会が増えたとよい。例えば、遠足に来てもらうとか、シイタケのほだ木にふれてみるとか、ニワトリや牛などの動物に接してみるとか、子ども達も喜ぶ場所がたくさんある。

□健森の整備 地域の児童生徒に来て使ってもらう。(ネイチャートレイル、遠足等、シイタケのほだ木、動物) 交通手段の課題

(定久) 高梁市は活発に PBL など地域を活性化する活動をしているので、高校としてはそういう形でお手伝いいただけないかなと思う。

□新見高校との交流(他校とも交流されている)

(鈴井) 新見高校との交流では、これまで同年代で行ってきたこととは異なり、お兄さんお姉さん世代の生徒にいろいろ教えてもらったり、いつもは友達としているような話題にしても、異なる視点で会話を交わすことができたりしていた。同年代の哲多中や新見第一中とはまた、違った感じで交流ができた。同世代の生徒と活動するよりも、高校生の生徒が上手に受け止めてくれたり、教えてくれたりして、よい交流が行えた。

□インターアクトクラブ(ボランティア)

共生高校が南小で LED ライトを使ったインターアクトクラブという、ボランティア活動を行っていた。ほぼえみ広場でも、大人の方や大学生の方のボランティアは今まで募っていたが、高校生にもお願いしてみてもうだろうか？

(鹿島) この前の校外学習では、NIU で大学生のボランティアさんに呼び掛けて、たいへん活発に答えていただいて、当日は一緒に遊んでいた。

(岡本) 中には、特別支援学校の教諭を目指している学生もいるので、今後、ボランティアをしたいと思う学生もいると思う。

(鹿島) また、ぜひお願いしたい。

□研修の継続

(中川) うちのセンター研修がひと月に1件あり、こちらの先生方に何人も来ていただいたことは度々あるが、対象は市内の小中学校全ての先生方である。

(岡本) そうすると、こちらで特別支援学級の担任の先生とか多いのか？

(中川) 多い。そういうことが残念だと思っている。特別支援学級ではなく、全ての先生方が対象である。発達障害の見方というのは、教科書で読む知識だけでは、対応できないことが多くある。多くの先生方と協議することによって、いろいろな考え方に触れ、いろいろなアイデアをもらったりできるのではないかと思う。

○C グループ 宮崎和司委員、山田浩久委員(大倉教頭、田野)

「健康の森学園支援学校を、広く知ってもらうために、企業と学校が連携してできること」

(大倉)『森の駅構想』に向けて、田中社長等働き掛けをしてくれているが、実現までには長い道のり。今すぐにてきすることはどんなことだろうか。

(宮崎) 市役所の販売が良かった(にこにこ市)

(山田) 自立支援協議会主催。このような行事イベントは今後増えていく。

(宮崎)「森の芸術祭」は、県から声掛けは無かったのか。

(山田) 市、県の担当者にうちの商品について知ってもらう必要がある。

(大倉) 商品のブランド化

(山田) 施設では商品の安定確保が課題。安定して商品をだせる事業計画。

シイタケ、野菜、焼き芋、卵、哲西栗、みそ、石けん・・・特産品として売り出す。

(田野) 学校も生徒数減少で商品の供給が間に合っていない。

(宮崎) みそなど、「加工品」は安定供給につながりよい。大豆は外から購入してみそづくりをするのは？

(山田)「豆から育てている」が売りなので、学園で作った大豆で提供したい。

(大倉)「もりの●●」、ラベルにもりん等の工夫

(山田) 企業に売り出しのとき等、協力してもらい「もりブランド」を広める。例として、軍手はローソンに買い取ってもらっている。

(宮崎) 良い物は高く価格設定をすればよい。

(山田) 企業コラボで商品力を高める。

(大倉) SNS の活用は。

(山田) 商品の注文数の想像ができない。また発送の問題がある。

セルプでの卵販売など、事前に先方に伝えておくのと店頭で周知してくれ、その日にお客様が集まる。

4 情報共有

その後、A グループ(山崎主幹)、B グループ(鹿島教頭)、C グループ(大倉教頭)が協議した内容を発表し、情報共有する。

5 質疑応答

(若林委員) 全体を通して、できなかったこと、挑戦してみたものの失敗したことなどを報告したり、協議の中に入れていただければ、会で意見を出し合い、次回に向けて、課題を見つけることができるのではないかな。

(上野副校長) 今後、会の中でできなかったこと等も含め、助言をいただき、よりよい方向に向け活動していきたい。

6 諸連絡(上野副校長)

第3回学校運営協議会 令和7年2月3日(月)10:00～

7 閉会挨拶(名越副会長)

昨年度より、地域の方のボランティア参加など、活発な活動ができています。今後とも、子どもたちの成長につながる活動ができるよう、委員の皆様方にお力添えいただきながら取組を行っていきたい。